



座談会 阿闍梨さんって、仏さん!!?

全国滋賀県人会連合会 会長

上野 幸夫

全国滋賀県人会連合会 副会長

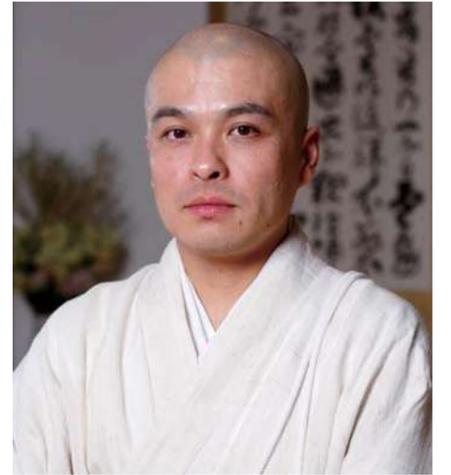
蔭山 孝夫 ほか

大乗院住職、覚性律庵兼務住職

光永 圓道

対談日:平成30年4月17日

場所:覚性律庵
(比叡山東麓:大津市仰木4丁目36-20)



覚性律庵とは?

1975年頃までは荒れ寺で、1979年に大師匠の光永澄道阿闍梨様が比叡山から、この覚性律庵に居を移され、本格的な復興整備が進められていきました。現在では、本堂をはじめ6棟の堂舎、本堂の裏には茶室もある優雅な伽藍となっています。大師匠が13年前に遷化され、昨年12月に受け継ぎました。比叡山の麓にありますが、天台宗安楽律法流に属するお寺です。

回峰行とは

回峰行は皆さんが眠っておられる深夜に、比叡山内にある自坊を出峰し、比叡山の山上山下にあります諸堂を巡拝し、早朝に戻ってきます。その後、勤行のほか、作務というのですが、お寺の仕事もこなさなければなりません。回峰行は「行不退」といって、ひとたび、行が始まると体調、天候不良など悪条件の日でも中断することはできません。

大津絵の 筆のはじめは 何仏 (芭蕉)

中断は「死」を意味していません。後戻りはできません。私が回峰行に入ったのは2002年でしたが、回峰行は基本的にチャレンジするというものではありませんから、身命を賭して、つまり命を絶つても行を全うする覚悟のもとで入らせていただきました。その年月の間には山あり、谷あり、色々な困難が待ち受けていました。色々な経験をさせてもらったことに、今では感謝しています。これからは、行を次世代に伝えていかなければなりません。回峰行という一つの行を終え、隠居の身となりまして、今後は色々なことに挑戦したいと思っています。とても、ワクワクしています。

僧侶になるきっかけは

中学の時に小児喘息をわずらったので、学校は100日ほど休んでいました。季節の変わり目に対応できなくなりました。

「体が弱い」という自覚があつて、このままでは20歳までに死ぬな思っていました。中学3年生の10月に比叡山での修行のお話をいただいて、自分で行くこと決めました。師匠(光永覚道阿闍梨様)との条件が比叡山高校に合格できたことでした。

僧侶になるというより、せめて高校は卒業しておかないと就職も適わないなと考えていました。中学を卒業した15歳の時に、比叡山無動寺谷にある明王堂へ上がらせていただきました。明王堂は坂本ケーブル山上駅から徒歩15分ほどの山道を下ったところにありますので、どこに行くにも徒歩で登るか、下るかしかないのです。同輩との集団生活は結構、楽しかったのですが、時々、喘息の発作も起こり、体力的にはきつかったです。ですから、回峰行は絶対無理だと思っていました。けれども、3年間もこのような生活をしていけると、自然と体力がついてきていました。体力が増進すると、気力もみなぎってくるのでしょうか、僧侶としてやっていけるのではという自信もつてきました。

一番の決め手は、師匠から大学進学をすすめられたことです。京都の花園大学という臨済宗の大学に行かせてもらって、それから僧侶になるという覚悟が決まりました。私の中の回峰行というのは、お山で生活させてもらって、体調が良くなって、育ててくれた比叡のお山に対しての「お礼参り」の気持ちでさせていただきます。

回峰行の教本はあるのですか?

明王堂輪番在任中は、回峰行を志す行者の指導に当たらねばなりません。私は、最初に「心構え」ではなく、「方法論」を教示していました。まずは、お参りの作法、つまり「形」を教えました。

回峰行に関しては、決まった場所です真言を唱えてお参りしますが、師匠から伝法されたことを教示します。テキストとなるべきものがあり、筆で書き写して製本します。それを見ながら行者は、お参りする場所、方角、真言など一回限りの伝法で記憶しなければなりません。テキストに詳しく書き記されているのではなく、口伝の部分が多いので、大変です。もちろん、頭で記憶しなければなりません。身体でも覚えなくてはなりません。したがって、作法を身につけてから

峰の白鷺といわれる回峰行者の姿は?

自身の思い、心構えを突き詰めていくものと思っているのです。

回峰行は、素足に草鞋履きで巡拝しなければならず、まず、草鞋に慣れることが必要です。さらに、無制限に多くの草鞋を使用することはできず、支給される数が決まっていますので大事に使わないといけません。というのも、一日一足というわけではないのです。一方、京都市中の社寺を巡拝するときには1日に5足ほど必要となります。アスファルトの道路は、まるでヤスリの上を歩いている感じです。草鞋で歩くのと靴で歩くのでは歩き方が違って、靴のように歩いていると怪我します。基本的には踵をつけません。つま先で歩いて、指を上げて歩きます。



回峰四白



回峰行千日満行



百日回峰



覚性律庵



出堂

死にたい
一度だけ「死にたい」と思ったことがありますが。「コンパルトメント症候群」を患った右足首が全然回らなくなったり、腰だけで歩いている感じでした。でも、

頭には蓮華をかたどった笠（蓮華笠）を頂き、400日目からは足袋をはくことが許されます。600日目からは杖も許されず。
回峰行者は浄衣と呼ばれる純白の装束で身を固めます。行半ばで挫折する不測の事態のとき、自ら命を絶たないといけないという厳しさから「死装束」と言われています。

千日回峰行の始まり

相応和尚（平安時代）によって創始された回峰行は、比叡山の峰々をめぐって礼拝する修行です。この行は法華経の中の常不軽菩薩の精神を具現化したものです。常不軽菩薩は出会う人々すべての仏性を、どれだけ非難されようと、人は皆、成仏すると会う人毎に軽んずることなく、礼拝されました。
回峰行は毎年3月下旬から始まり

千日回峰行は7年間

1年目〜3年目は1日30kmの行程を毎年100日間行います。定められた礼拝の場所は東塔、西塔、横川、日吉大社に260ヶ所。遥拝するところもあれば、足元の石仏野積みの護法石までお参りします。
4年目〜5年目は同じく30kmをそれぞれ200日。ここまでの700日を満じて9日間の「堂入り」です。

6年目

これまでの行程に京都の赤山禪院への往復が加わり、1日60km、100日行います。800日目は、別名「赤山苦行」ともいわれます。赤山禪院は慈覚大師円仁ゆかりの寺で、大師が新羅より請来したという赤山明神をお祀りしてある、天台宗の古刹寺院です。平安京の鬼門にあたる場所、ここまでが比叡山の結界です。

7年目

200日を巡ります。前半の100日間は900日目。「京都大廻り」と呼ばれ、比叡山中の他、赤山禪院（赤山苦行）から京都市内を巡拝し、全行程84kmとなります。この時は京都のお寺で一泊します

堂入り

「堂入り」は無動寺谷明王堂に9日間籠もって、断食、断水、不眠、不臥で、不動真言を10万遍唱え続ける行で、入堂前、今生との別れを告げる行者の生き葬式が行われます。この儀式によって、「動」の回峰行から「静」の行といえる堂入りへと切り替えられるのです。

5日目からは、うがいが許されます。厳正を期すために同じ大きさの器が二つ用意され、片方には並々と水が張られています。他方の空の器にうがいをした後の水を吐き出すのですが、同量でなければならぬからです。
2007年10月21日、9日間で12kg体重が減少して行を終えました。この間、断食はあまり苦になりませんでした。断食はともにも断水は、僧侶の誰かが必ず付けてくれ、眠らないように気をつけてくれました。胃の中に食物が残っているときは、睡魔が襲ってきて、3日目位までは意識が朦朧となる時もありました。しかし、3日目くらいからは後は、徐々に眠らなくなりました。堂内は基本的には真つ暗で蠟燭の灯りだけですので、感覚はほとんど冴えてきます。一番、敏感なのは鼻と耳だったので、麓の車の音や、京阪電車の走行する音が聞こえてきました。感覚が冴えてくるほど、要らぬことを考えます。

お釈迦様は一週間菩提樹の下で座禅瞑想をされて、色々な煩惱や誘惑などを打ち払って「悟り」を開かれているの

いところをかばってはいけない」といわれていました。かばうと別のところに負担がかかり、腰を痛めます。すると歩くことができなくなるのです。

足に大きなけがを負うー最大の危機

回峰行は怪我がつきもので、捻挫したり、膝を痛めたりしますが、900日目の京都大廻りの最中、蓄積疲労によって足に大きな怪我を負いました。右足の膝から下、ふくらはぎのあたりから腫れ上がる「コンパルトメント症候群」を発症してしまっただけです。本来なら、足の患部にメスを入れ、圧を逃すのですが、そうすると歩くことができなくなり回峰行を断念しなければなりません。なんとか、抗生物質の注射、筋肉注射で改善していきましたが、症状が落ち着くまで1か月半、4月上旬から5月下旬までかかりました。

で、断食、断水、不眠、不臥は生きることを全否定するという意味があります。堂入りはお釈迦様が悟りを開かれた時の追体験と言われています。それで何も考えず、一心にお不動様に感じたいのです。逆に感覚が鋭くなると色々な情報が入ってききましたので、受け入れる作業ではなく、それらを排除していく作業をします。

普通なら感じたことをそのまま受け入れませんが、それを排除していく作業をする。だからといって「空」になれるかといえば、たぶん「空」になれない。でも、「空の」状態になれるよう努力を続けました。
毎日夜中の2時に本尊様にお供えする水（開伽水）を近くの開伽井で取水します。それ以外は外に出ることは許されていません。

9日目、最後のお勤めの後、朴の湯を飲み、三礼して、お堂の内陣を3回廻ります。朴の湯を飲むと、毛細血管の血が動き出すのがわかり、しびれるような、むずかゆいような不思議な身体の内側の感覚です。
満行すると、行者は生身の不動明王といわれ、「堂行満阿闍梨」として信者たちの合掌で迎えられます。今後は自分のための「自利行」から衆生済度の「利他行」に入ります。

膝を痛める

6年目、赤山苦行の頃、膝を痛めてしまいましたが、常々、師匠から「痛

痛めたほうの足をかばって歩くと、変な歩き癖がつき、腰にも痛みが広がっていくことは分かっていたので、痛くても普通に歩くように努めました。激痛に耐えながらも足を進めることはできたのですが、いやが応にも歩みはスピードダウンします。自分の歩き方が「まずかった」ということはわかっていたので、投薬や注射の助けを借りて「歩きながら治していく」ほかにありませんでした。

発症した当初は、正直いつて精神的に、ものすごく落ち込みました。その時、「どうやって死のうか」と「死」が頭をよぎりました。それを払拭してくれたのは、大廻りの沿道で私のお加持を受けるために待っていてくれた人々の存在でした。この時、回峰行は行者一人の力だけでなく、支えてくれた多くの人々の力で成し遂げられるものだと実感しました。本当に有り難かったです。スポーツ選手が「応援者の声援から力をもらった」と表現されていますが、まさにその通りでした。私も、目に見えない力で支えてもらったと感じました。

最後の100日

大廻り満行後の100日は比叡山内30kmを巡拝し、千日満行となります。実際には75日間の巡拝で、975日で千日回峰行を満じたこととなります。残りの25日には「一生かけて修行をしなさい」という奥深い意味があります。



京都大廻り (京都滋賀具人会館近く)

みつなぐ えんどう
光永 圓道 経歴

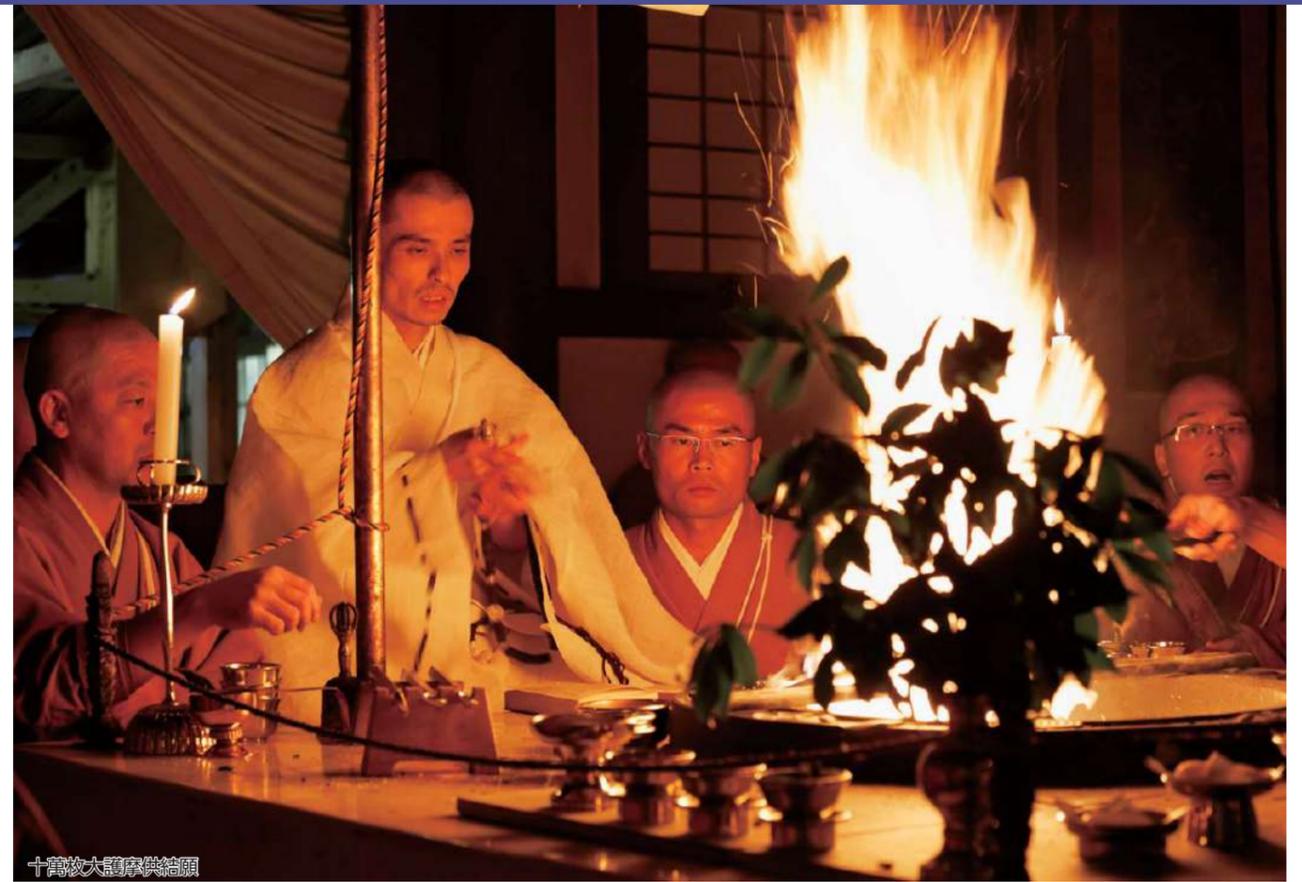
- 1975年 東京都に生まれる
- 1990年 比叡山にて得度受戒
- 1997年 花園大学文学部仏教学科卒業
- 2000年 延暦寺一山・大乘院住職
- 2008年 明王堂輪番拜命
- 2009年 千日回峰行満行。北嶺大行満大阿闍梨
- 2015年 3月1日 12年籠山行満行
- 2017年12月1日 明王堂輪番を辞し、覚性律庵に居を移す
- 現 在 大乘院住職、覚性律庵兼務住職

八千枚大護摩供

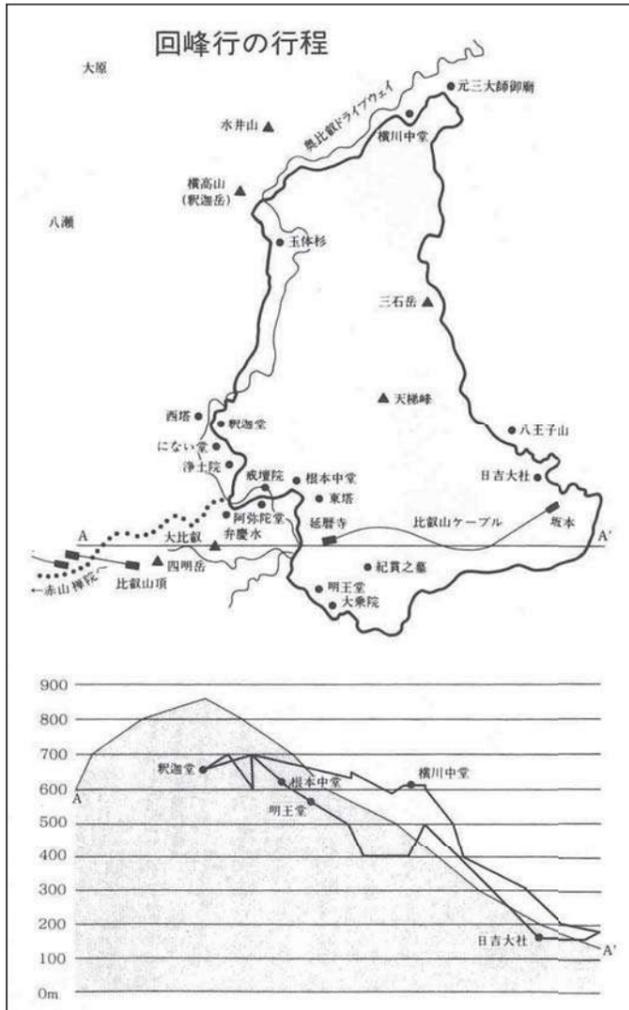
2010(2017)年まで毎年、八千枚の大護摩供を修し、2012年には十萬枚大護摩供を行います。皆様の願い事を不動明王様に取り次ぐのが護摩供です。その準備のため、五穀(米、大麦、小麦、大豆、小豆)・塩断ちの食事制限のある前行をして臨みます。

※参照 光永圓道『千日回峰行を生きる』(2015年、春秋社発行)

※今回は座談会の出席者の質問に、光永圓道北嶺大行満大阿闍梨さんが答えられるという形式になっています。



十萬枚大護摩供結願



「つらい」という気持ち

回峰行に関しては「つらい」という言葉を使いません。「つらい」と言えば、自分が志した行なのです。筋違いだらうと言われます。「つらくはないが」、毎日がしんどい。

現在、阿闍梨さんは何人おられますか？

私を含めて6名です。織田信長の焼き討ち(1571年)からで、私で50人目です。私の場合28歳の時に千日回峰行に入門して、32歳で阿闍梨になり34歳で満行しています。年齢としては若い方だと思います。

お釈迦様になる？

お釈迦様に近づくことはできても、お釈迦様にはなれない。私自身の本質に関しては多分変わっていないと思っています。変わったことと言えば、一番、最初に思ったのは、プラス思考は必要ないということです。事を始める前からプラス思考になるのではなく、終わった時点で最終的に「結果」がプラスだったら良いのではないのでしょうか。そのために、どうしてもいいか、自分を徹底的に叩き落す。底辺まで叩き落す。究極の



土足参内

「マイナス思考」、最悪、最悪を想定します。その当時、「想定内」とか、「想定範囲内」という言葉が流行しましたが、想定内で済んだら「よかった」と感じ、プラスで終わります。もしも「想定外」のことが起こったら、自分の考えが至らなかった、ある意味、諦めにもなります。

北嶺大行満大阿闍梨

2009年7月5日、京都大廻りを終え、9月18日、千日回峰行を満行。ここで、「北嶺大行満大阿闍梨」と称されます。

土足参内—京都御所にて

1か月後の10月12日に行われた土足参内は、平安時代、相応和尚が時の皇后の病氣平癒のため、宮中で祈祷したという故事に由来しています。草鞋履きのまま参内します。